編集委員が行く

地域から生まれた新しい雇用創出の形。若者と高齢者、障がい者の力で町を支える。

プロジェクト尾道（おのみち）（広島県）

㈱ダックス四国　福山工場　障がい者雇用責任者 且田（かつだ）久美

編集委員から

制度ありきでスタートする障がい者の就労支援の現状のなか、このプロジェクトからは、地域自らが気づき動くことで、その地域の現状や課題、強みを最大限に活かす雇用創出や雇用活性が可能だと気づかされる。このような動きが各地で広がれば、障がい者の活躍できる場はさらに増えていくだろう。

取材先データ

新和ビル・サービス株式会社
〒722-0025　広島県尾道市栗原東１丁目6-29
TEL 0848-23-9102

尾道市役所
〒722-8501　広島県尾道市久保１丁目15-1
TEL 0848-38-9111

広島県立尾道特別支援学校
〒722-0022　広島県尾道市栗原町1524
TEL 0848-22-5248

Keyword：特別支援学校、就労継続支援Ａ型事業所、サービス業、職場環境の整備、地域密着、高齢者

「プロジェクト尾道」の濱原一将代表

POINT

① 町ぐるみのプロジェクトを発動。若者・高齢者・障がい者がともに“育ち”“生きる”新しい仕組みを地域で実践
② 観光業や清掃業で雇用を創出。若者、高齢者、障がい者を主役に町を活性化
③ 地域愛から生まれた深く強い連携

日本人の誇り

取材初日、目の前に座る「プロジェクト尾道」の代表であり、新和ビル・サービス株式会社の業務執行役員を務める濱原一将さんは、唐突にこう切り出した。「日本人が思う、日本の誇れるところは何だと思いますか?」。戸惑う私に、こう続ける。

「あるアンケートでは、2位が『食の豊かさ』。1位が『清潔な環境』という結果が出ているそうです」

なるほど。四季のある私たちの国では、春夏秋冬それぞれの旬を味わうことができる。清潔な環境という結果にも頷ける。日本はどの国よりも公共施設がキレイだと、海外の知人たちが感嘆の声をあげるのを何度も見てきた。

「では、『日本人が一番就きたくない職業は?』という問いには何が上位に挙がると思いますか? 2位は農業。1位は清掃業です。僕たち日本人は、自分のしたくない仕事で創出される成果を自分の国の誇りに思っている。この答えから見えるアンバランスさに、いきどおりを感じずにはいられません。それと同時に、少子高齢化による労働力不足といった課題の裏側にある、働きたくても働ける場所がないと嘆く高齢者の存在や、改善のペースが進まない障がい者雇用の問題にもまた同様のアンバランスさが露呈していると感じます」

圧倒される私に、濱原さんはひとつ呼吸を置き、「僕たちの会社は清掃業です。縁があって障がい者も高齢者も雇用している。そんな僕たちだからこそできる、雇用開発の仕組みがあるはずだと、今年このプロジェクトをスタートさせました。キャッチコピーは、『私たちが取り戻す日本の誇り。若者と高齢者、障がい者のパワーで清掃を変える!』どうです? 情熱大陸風で恰好いいでしょう?」と、屈託なく笑い立ち上がった。「さあ、プロジェクトの現場をご案内しましょう」

海の町、尾道

プロジェクトの舞台となる尾道市は人口約13万7千人。広島県東部に位置し、三方を山に囲まれ、南側に瀬戸内海が広がる温暖な港町だ。その気候を活かし、柑橘類の栽培が盛んに行われており、はっさくや国産レモンなどの発祥の地でもある。また、広島県下においても有数の観光地で、近年は瀬戸内しまなみ海道沿線の島々で構成されたエリアを拠点に、サイクリングの人気コースとして注目を集め観光客も増加。それにともない、宿泊施設などの開業もここ数年増加している。

一方で、人口は年々減少を続けており、特に生産年齢人口の総人口に見る割合は、1990(平成2)年の64・9%から2016年には54・4%まで減少。また完全失業者は、生産年齢人口が減少傾向にあるにもかかわらず、常に4千人前後を推移しており、障がい者手帳の発行部数は、ここ数年増加傾向にある。

尾道市風景写真

プロジェクトの背景

プロジェクトは、この尾道市で清掃業を行う企業を中心に、構想準備期間2年を経てこの春に発動された。その背景には、前出の地域概況にもあるような、少子高齢化、生産労働人口の減少などから生まれる地域課題が影響する。地域のにない手不足、若い世代の他地域への流出を引き金とした地場産業の弱体化、社会保障費の増大など。この町で生まれ、この町で育ち、この町で事業を行う企業人たちにとっても、見過ごすことができない課題ばかりだ。

※本誌では通常「障害」と表記しますが、且田委員の要望により「障がい」としています

プロジェクトメンバーの3人。左から村上凌太さん、高原光希さん、村上タツコさん

“プロジェクト尾道”での清掃の様子

いま、ここに在るものを力に

とはいえ、その地域課題を嘆いているばかりでは前に進まない。地域活性、雇用開発をどう進めていくのか。濱原さんを中心に、後にプロジェクトの構成メンバーとなる数人は、全国で開催される講演会に足を運ぶことからスタートした。北に南にアンテナをはり、各地の事例を学んだ。特産品の開発、有名レストランの誘致、大掛かりなイベントの開催。目にし耳にし、その度に刺激を受ける毎日。そんな日々を重ねるなか、ふつふつと湧いてきたある想い。「斬新なものや、いまここにない刺激的なアイデア、本業からはずれた事業展開。この町ではないどこかから取り入れたそれらで、本当に描く未来へ近づけるのか?」

さまざまな課題を抱える自分たちの町。それでも、愛すべきかけがえのない故郷。全国を走り回る日々は、いま、この町に在るものに視点を移すきっかけとなったという。この町で増加傾向にある、高齢者や障がい者、生き辛さを抱える若者たち。ともすれば社会的弱者といわれる彼らとともに、この町を活性化できたらどんなに面白いだろうか。この町の強みである観光業。国内海外から訪れる多くの観光客が、泊まったホテルで、立ち寄る公衆トイレで、パンフレットを求めて入った市役所で、あっと驚くおもてなしの清掃を目にしたら……。これまでの清掃の概念を覆す、魅せる清掃、プレゼン力を持つ清掃を、彼らと創りたい。支えられる人から、この町を支える人へ。課題を強みに。彼らを主役にこの町を活性化する。いま、ここに在るものを力にしよう!

こうして発動したプロジェクトは、清掃業や観光業、飲食業を行う地元企業複数社と特別支援学校などの教育関係者、障がい者支援にかかわる福祉関係者、行政、将来を模索する若者たち、働き続けたいと願う高齢者、そして一般就労を目ざす障がい者など、幅広いメンバーで構成された。それぞれの立場はさまざまだが、「この町をいきいきと働き続けられる町にしたい」という想いは共通だ。

3つの仕組み〝きょういく〟の

プロジェクトは、大きく3つの事業に分けられる。彼らはそれを、3つの〝きょういく〟の仕組みと呼ぶ。

1つ目は、ともに育つ「共育」の仕組み。ここではまず、若者や障がい者へ、清掃を教えることのできる高齢者サポーターを育成する。選出された高齢者は、働き続けたいと願う人のなかから選ばれた。プロジェクト構成メンバーは、それぞれの領域を(例えば、清掃業のプロからは清掃を、特別支援学校や障がい者雇用をすでに実践している企業からは彼らに仕事を教える方法を)プロの目線でとりまとめた教育ツールを作成し、高齢者へ伝授していく。そうして育成された高齢者サポーターが、実際の清掃現場で、若者や障がい者に仕事を教えていくのだ。

試行錯誤を重ねながら改訂を続けているというその育成ツールを見せてもらったが、その具体的で詳細にわたる内容に驚いた。若者や障がい者には、ともに働く高齢者サポーターから、清掃業務だけでなく働く力や生きる力も継承されていく。同時に高齢者は、彼らから次世代を育てるという使命感や働き甲斐を受け取っている。プロジェクトでは発動から6カ月で、3人の高齢者サポーターを育成し、そのサポーターから仕事を教わった障がい者2人は、すでに地元の宿泊施設などで清掃のプロとして活躍している。特筆すべきは、その一連の過程で、福祉的な制度を活用していないという点だ。これが地域の力や知恵を結晶して動く共育事業である。残された膨大な共育日報からは、戸惑いもがきながら、それでも若者や障がい者に必死で向き合い、彼らとともに育っていく高齢者サポーターの軌跡がうかがえる。

2つ目は、ともに進む「共行」の仕組み。プロジェクトがこだわる、魅せる清掃を構築する事業だ。「就きたくない仕事。そう揶揄される清掃の仕事を、このプロジェクトの力で、プレゼン力を持つ清掃へ変革していきたい。ほかに働くところがないから

ガラスクリーニングの様子

訓練生の村上凌太さん（左）に清掃を教えるサポーターの村上タツコさん（右）

と選ぶ仕事ではなく、たくさんの人が誇り高き仕事として清掃業界を目ざすキッカケを創りたい」と濱原さんは語る。現在、国家資格のビルクリーニング技能士の仕組みをベースに、魅せる清掃マニュアルを作成中で、来年には関連企業や行政も巻き込んで、魅せる清掃プレゼン大会を開催予定とのこと。「実は、6月に開催された自社内の発表会で、その大会の競技種目として予定しているガラスクリーニング大会を模擬開催しました。障がい者と高齢者、若者が混合で参加し、断トツの成績で優勝したのは障がい者でした」と、嬉しそうに微笑んだ。

3つ目は、ともに生きる「共生（きょういく）」の仕組み。

セミナーの様子

このプロジェクトの一連の動きや地域の変化を、関係者だけに留めず地域の若い世代と共有したいと、セミナーを2カ月に1度のペースで開催している。参加者は決して福祉に興味のある人ばかりではない。「全国で開催されるセミナーにたくさん参加してきましたが、完成形を垣間見るものがほとんどでした。それはそれで勉強になりましたが、なんだか遠い世界のような気がして、自分たちに重ねられる具体的なイメージが持てないことが多かった。僕たちは、この町でともに生きる若者たちと、一瞬の刺激を共有したいわけではない。プロジェクトがゼロから1に積み上がっていく様を具体的に共有し、いい大人たちが走り回り、泣いたり笑ったり……そのなかで事業が生まれ、雇用が創出される面白さをリアルに示したいのです。そうすることで、この町や、働くということに夢や熱さを持つ若者が増えるのではないかと思っています。それはイコール、この町を活性化するということにつながります」。春からすでに3回開催し、その参加者は徐々に増えているとのこと。

地域密着企業、新和ビル・サービス（株）

プロジェクトの成り立ちや背景、その仕組みをお聞かせいただいたあと、構成メンバーのもとを訪ねて歩いた。まずは濱原さんの所属する企業、新和ビル・サービス株式会社へ。1972（昭和47）年設立、従業員数219人（パート・アルバイト含む）。ここ尾道市で清掃業を生業とするビルメンテナンスの会社である。グループに、特例子会社である「株式会社シンワユニパル」、就労継続支援A型事業所の「株式会社チャレンジドパーソン」を持ち、グループ合計32人の障がい者を雇用している。

「清掃業界は、ここ近年どこも人材不足で苦しんでいます。どれだけ求人を出しても応募者が来ない。そんなとき、地元の特別支援学校から清掃授業の講師をお願いしたいという依頼がありました。地域貢献になるのであれば……、という想いでお引き受けしたのが3年前のことです。私たちは清掃のプロですが、それまで障がい者と清掃をした経験がありませんでした。当初は本当に障がいのある生徒さんに、清掃を教えることができるのか、という不安がありました。けれど、実際に講師を務めて驚

新和ビル・サービス株式会社
代表取締役の小林輝久さん

ベッドメークの指導をする衛藤恵美子さん（左）

清掃現場で活躍する岡本紘也さん

いたことは、時間をかけて丁寧に教えることができれば、多くの生徒は十分に作業ができるということです。この気づきをキッカケに、特例子会社を設立し、本格的に障がい者雇用をスタートさせました。また、さらに重度の障がい者にも働くという経験を積んでほしい。そのチャンスの裾野を広げたいと、A型事業所も設立し、現在に至ります」と話すのは、代表取締役の小林輝久さん。グループで雇用される障がい者は、全員フルタイム雇用。平均賃金10万円を超えるとのこと。

話をおうかがいするなかで、ふと疑問が生まれた。自社でA型事業所を運営し、工賃支払いの実績も地域内ではトップクラス。そんな企業が、福祉的な制度をあえて活用しないプロジェクトの構成メンバーとして、ここまで力を注ぐのはなぜか。率直に問いかけてみた。

「弊社のA型事業は、一般就労へ送り出す通過点であるという理念のもとで運営しています。実際に開所から2年で利用者の約20％が、弊社の特例子会社や地元企業へステップアップを果たしました。その期間が極めて短い方もいれば、数年を要する方もいる。日々、少しずつ精神面のサポートさえできれば、継続して企業で活躍できる方もいる。と、いうように、個々のケースは多岐に渡るということもこの数年で実感しました。A型事業所は、国や市町村から委託費が支給されて運営しています。その原資は私たちの税金で賄われている。そうであれば、けっして無駄遣いはできません。地域が工夫をし、雇用側が付加価値を見出し、その課題を包み込むような仕組みができるとすれば、A型事業所や移行支援といった、福祉サービスを利用しなくても雇用達成できる方は存在する。個々のケースや可能性に応じて棲み分けをすることにより、A型事業所は、より手厚い支援が必要な方に利用のチャンスを広げられると考えます」と、小林さん。その強い眼差しからは、地元贔屓をポリシーに、この町で長く企業経営にたずさわる、地元を愛する企業人ならではの覚悟がうかがえる。

高齢者サポーター

次に、実際に高齢者サポーターとして活躍する衛藤恵美子さん（77歳）のもとへ。そこは、尾道市内の宿泊施設。宿泊客がチェックアウトを済ませた一室から、「シーツの端を揃えて！　時間を意識してね！」と、ハキハキと指示をする声が聞こえる。その声の主、長年この仕事に従事している衛藤さんが、このプロジェクトにかかわろうと思ったキッカケをうかがった。

「長く清掃の仕事にたずさわっていますが、ここ数年は年齢的にも体力的にも、引き際を考えることが多くなっていました。そんなとき、これまで積み重ねてきた経験や知恵を、若い子たちに継承してほしいとお願いされ、年はとったけれど、まだだれかのお役に立てるチャンスがあるのかもと決心しました」と、話す衛藤さん。実際に彼らに仕事を教えてみてどう感じているのだろう。

「最初は、素直でかわいいと思いました。でも実際に仕事を教えてみて、何度教えても伝わらないことも多く、もどかしい気持ちになることもありました。くり返しくり返し、子どもや孫を育てたように向き合う日々です。最近では、休みの日にもふと彼らを思う自分に驚いています」と話す衛藤さんの横で、落ち着いて作業を続ける障がい者の姿。こうして高齢者サポーターから継承された清掃技術や、温かさを力に、彼らもまた一般就労を達成していくのだろう。

プロの現場で活躍する障がい者

実際に共育事業により高齢者サポータ

尾道特別支援学校の服部秀樹校長

平谷祐宏尾道市長

ーからサポートを受け、プロの清掃現場で活躍する岡本紘也さん（27歳）に話を聞いた。尾道市内の総合病院で、スムーズに清掃機械を操る岡本さんは、発達障がいがある。

「最初は、できないことばかりでむずかしかったです。でも、高齢者サポーターの方が何回も丁寧に教えてくれました。少しずつ自信がついて働くことができました」。はにかみながら、こう話してくれた。

現在、この現場で主に外来の各課の清掃を担当し、現場スタッフからの評価も高い。お給料は約13万円。次の目標は清掃検定に合格することだと目を輝かせる。

地域の特別支援学校

このようなプロジェクトの動きを、地域の教育関係者はどうとらえているのだろうか。

尾道特別支援学校、服部秀樹校長は「このプロジェクトをきっかけに、当校の卒業生の多くもすでに一般就労を達成しました。卒業後は自立と社会参加に向けて、生徒一人ひとりの可能性に応じた選択肢が、地域内でこれほど活発に創出される事例はほかにないことだと感じます」と歓迎する。

プロジェクトの動きに連動するかのように、尾道特別支援学校では昨年、卒業生の約70％を一般就労およびA型事業所へ送り出した。その数字は、多くの関係者に驚きを与えたと聞く。

町として。尾道市長の想い。

最後に、プロジェクトの舞台、尾道市の平谷祐宏市長のもとへ。この町で生まれたプロジェクトが、熱さと成果を生み出しながら、その歩みを加速させている現状をどう見ているのだろうか。

「若者を中心に、地域内でこのような動きが生まれることは素晴らしいこと。企業が、町が、住民が、それぞれの立場で地域を想い、雇用創出のアイデアを出し合うことで、町はさらに元気になる。理想論や福祉観点からだけでなく、働く障がい者も、雇用する企業も、新しく創出される事業やそれを受け入れる地域にとっても、『八方よし』の仕組みであることが大前提。そのために、プロジェクトとも連携し理解を深め、町としてできることはこれからもダイナミックに応援していきたい」と、平谷市長。

「若者が頑張っている、何かを始めようとしていると聞くと、土日早朝深夜を厭わず駆けつけて応援してくれる市長です」と、濱原さんは笑う。フットワークの軽やかな市長のエールは確実に地域の若者に届いているようだ。

夢はまだその先に

取材最終日、濱原さんから、「プロジェクト尾道」の目ざすもう一つの夢をうかがった。

「2020年東京オリンピック、パラリンピック。世界中からたくさんの人が集まるその場所で、僕たちの魅せる清掃チームが活躍します。爽やかにキビキビと、それはもはや低層の仕事ではありません。清潔さとおもてなし。日本の誇るその強みを、日本人自身の手で創出する。その主役が、高齢者や障がい者、生き辛さを抱える若者たちであったとしたら、そこにいるすべての人はどう感じるでしょうか。その風景を見てみたい。それがもう一つの夢です」

私もその風景を見てみたい。そう強く思いながら、尾道市をあとにした。

急激な人口減少という課題を目の当たりにしている現在の日本では、たとえ障がいがあろうとなかろうと、どれだけ年齢を重ねようとも、働きたいと願う一人ひとりのその想いを支え叶える仕組みを創ることこそが、この国の課題を解決することにつながると確信した取材であった。この海と山に囲まれた魅力的な町で、まだ産声をあげたばかりのプロジェクトが、就労支援や福祉的観点という枠を超えて、さらに大きなうねりとなって、全国各地に広がることを願ってやまない。